志雲会東京第一回勉強会
テーマ：「古事記　大国主命の国譲り」　要約（その５）

松田　武

速須佐男命が高天原から追放されて、出雲地方にやって来ます。古事記のストーリーはやっと出雲に達しました。

８．速須佐男命の八岐大蛇（やまたのおろち）退治

高天原から追放された速須佐男命は放浪の旅を続け、ある日空腹を覚えます。

（１）五穀の起源

『又食物乞大氣津比賣神、爾大氣都比賣、自鼻口及尻、種種味物取出而、種種作具而進時、速須佐之男命、立伺其態、爲穢汚而奉進、乃殺其大宜津比賣神。故、所殺神於身生物者、於頭生蠶、於二目生稻種、於二耳生粟、於鼻生小豆、於陰生麥、於尻生大豆。故是神產巢日御祖命、令取茲、成種。』

空腹を覚えた速須佐男命は出会った大氣津比賣神（おおげつひめのかみ）に食べ物を乞います。そこで、大氣都比賣は鼻、口そして尻よりいろいろな食べ物を出して速須佐男命に供します。それを見た速須佐男命は「汚いものを自分に食べさせるのか」と大氣都比賣を切り殺してしまいます。切り殺された大氣都比賣の体から次のようなものが生まれます。

① 頭から　蚕
② 二つの目から　　稲種
③ 二つの耳から　　粟
④ 鼻から　　小豆
⑤ 陰（ほと）から　麥（むぎ）
⑥ 尻から　　大豆

そこで、穀物の祖先の神である神產巢命（かむすびのみこと＝思金神の親）はこれら五種の穀物を取って、種としました。

古来日本人は常に「破壊」や「死」という現象の中にも破壊されざるもの、死せざるものを見た、ということです。従って、切り殺された大氣都比賣の体から蚕、稲、粟、小豆、麥、大豆が生まれたのであります。それら五穀は日本人の生活を豊かにしました。ある意味、追放された後の速須佐男命が行った仕事の一つだとも言えます。

余談ながら、この食べ物の神は日本書紀では「保食神」（うけもちのかみ）と呼ばれます。

速須佐男命に切り殺される大氣都比賣

天照大御神が葦原中つ国に食べ物の神がいることを知り、月讀命にそれを確認に行くよう指示します。月讀命が保食神に会った際、保食神は月讀命をもてなそうとした際、口から米や、大小の魚、毛皮の動物たちが出したため、月讀命はなんと汚らわしい、として保食神を切り殺してしまいます。月讀命はそのことを天照大御神に報告すると、天照大御神はたいへんお怒りになり、もうお前とは会いたくない、と言って、天照大御神は月讀命と昼と夜とに分れて、住まわれるようになったと言います。

その後、天熊人（あまのくまひと）を遣わして確認させたところ、保食神の体のあちこちから、牛馬、粟、蚕、稗、稲、麥、大豆が生じていたと言うことです。

（2）速須佐男命と櫛名田比賣家族との出会い

速須佐男命は旅を続け、出雲國の肥河（ひのかわ）“のちの斐伊川”の上流の鳥髪（とりかみ）というところにやってきました。川の流れを見ていると、たまたまお箸が流れてくるのが目にとまりました。お箸が流れて来るというのは、きっとこの川の上流に人が住んでいるに違いない、と考えて、上流に向かって歩みを進めました。たどり着いた一軒の家で、

『老夫與老女二人在而、童女置中而泣、爾問賜之「汝等者誰。」故其老夫答言「僕者

國神、大山津見神之子焉、僕名謂足名椎、妻名謂手名椎、女名謂櫛名田比賣。」』

　年老いた男と女が、うら若い少女を間において泣いておりました。そこで速須佐男命は「汝等（あなたがた）は誰ですか」と訊かれました。訊かれた老夫は「私はこの国を治める国つ神である大山津見神（おおやまつみのかみ）の子であります。名前は足名椎（あしなづち）、妻の名は手名椎（てなづち）、娘の名は櫛名田比賣（くしなだひめ）と申します、答えます。

　父親は娘の足をなで、母親は娘の手をなでるようにして育ている、つまりたいそう可愛がって育てている、というのがよく分かる名前です。倭撫子（やまとなでしこ）の語源だと言われております。撫でし子、大事に育てたという実感が湧いて来ます。
　また、櫛名田比賣は奇し稲田（くしいなだ）姫すなわち霊妙な稲田の女神と解釈されています。なお、大山津見神はイザナギ、イザナミの間に生まれた神々のお一人です。

　サッカー日本女子代表の愛称は「なでしこジャパン」と言いますが、古事記を学ぶ者にとり、「なでしこジャパン」はさらに親しみが湧いて来ます。

『亦問「汝哭由者何。」答白言「我之女者、自本在八稚女。是高志之八俣遠呂智毎年來喫、今其可來時、故泣。」爾問「其形如何。」答白「彼目如赤加賀智而、身一有八頭八尾、亦其身生蘿及檜榲、其長度谿八谷峽八尾而、見其腹者、悉常血爛也。」』

　速須佐男命はさらに問います。「なぜ泣いているのだ」。足名椎は答えます。「私どもにはもともと八人の娘がおりました。ところが、高志（こし）という所に八俣遠呂智（やまたのおろち）という怪物がおりまして、毎年やって来ては娘を食います。今年もその怪物がやってくる時期になりましたので、泣いております」。

　速須佐男命は問います「その怪物はどんな形をしておいるのだ」。足名椎は答えます。「その目は赤かがち（赤いほおずき）のように真っ赤で、一つの体に頭が八つ、尾っぽが八つあります。また、その胴体には蘿（こけ）や檜（ひのき）が生えており、その長さは八つの谿（たに）、八つの谷峽（たにお＝やまあい）をわたるほどです。そして、その腹を見れば、常に血で爛れているようなヤツです」

　八俣遠呂智（やまたのおろち）という怪物は別に「八俣大蛇」と表現され、八つの頭を持つ大蛇として理解されております。足名椎も「身一有八頭八尾」と言っております。余計なことを述べれば、俣（また）が八つあれば計算上、頭は九つあることになります。その矛盾に気づいたのでしょうか、広辞苑には「八岐大蛇」として登載さ

れております。
　漢和辞典によれば、「岐」は「キ」あるいは「ギ」と読みます。意味は①分かれ道、えだ道、②高い、③ワかれる、とされております。「岐」という当て字を用いることで、八俣遠呂智と身一有八頭八尾の矛盾が解消されております。ひょっとすると、元の名前は　八頭（やあたま）のおろちだったのかも知れません。古事記はいろいろ想像の翼が広げさせてくれます。

　それはさておき、速須佐之男命はとんでもないことを言い出します。

『爾速須佐之男命、詔其老夫「是汝之女者、奉於吾哉。」答白「恐不覺御名。」爾答詔「吾者天照大御神之伊呂勢者也、故今、自天降坐也。」爾足名椎手名椎神白「然坐者恐、立奉。」』

　速須佐之男命は老夫（おきな）に向かって、「お前の娘なら、わしの嫁にくれ」。それに対しおきなは「恐れながら、あなた様のお名前はなんとおっしゃいますか」と問います。速須佐之男命とは「わしは天照大御神の弟である。今しがた高天原より降りて来たのだ」と答えたところ、足名椎手名椎神の二親は「それは恐れ多いこと。差し上げます」と返事しました。

（３）速須佐之男命の八俣遠呂智退治

　いよいよ速須佐之男命の八岐大蛇退治です。まず、八岐大蛇を迎え撃つ準備です。

『爾速須佐之男命、乃於湯津爪櫛取成其童女而、刺御美豆良、告其足名椎手名椎神「汝等、釀八鹽折之酒、亦作廻垣、於其垣作八門、毎門結八佐受岐、毎其佐受岐置酒船而、毎船盛其八鹽折酒而待。」』

　足名椎手名椎神から娘を嫁に貰うことの承諾を得た速須佐之男命は娘を爪櫛（つまぐし）に変え、自分の美豆良（みづら＝角髪）に刺しました。その上で、「お前たちは、八鹽折（何度も）に絞った強い酒を釀し出せ。そして、垣を作り廻らせ、その垣と垣の間に八つ門を作れ。その門ごとに八つの佐受岐（さじき＝桟敷）を設え、その桟敷毎に酒船（さかぶね＝酒槽）を置け。その酒船に先ほど言った八鹽折に絞った強い酒を満たし、待っておればよい。

『故、隨告而如此設備待之時、其八俣遠呂智、信如言來、乃毎船垂入己頭飲其酒、於是飲醉留伏寢。爾速須佐之男命、拔其所御佩之十拳劒、切散其蛇者、肥河變血而流。故、切其中尾時、御刀之刄毀、爾思怪以御刀之前、刺割而見者、在都牟刈之大刀、故取此大刀、思異物而、白上於天照大御神也。是者草那藝之大刀也。』

速須佐之男命のお命じになる通り準備して待っていると、八俣遠呂智が信に（まことに）語られた通りの姿でやって来ました。そして、酒船毎に頭を垂れて酒を飲み始めました。そうすると、強い酒に酔っぱらって、そこに留まり伏して、寝てしまいました。そこで、速須佐之男命はそのチャンスを逃さず、腰に佩いた十拳劒を抜いて、その蛇どもを切り散じられました。そのため、肥河（ひのかわ）は血に變わって流れた。

八俣遠呂智を退治する速須佐之男命

そして、速須佐之男命が尾っぽに切りつけたところ、御刀の刃が毀けました。これは怪しいと思って、御刀の前（さき）を使って、刺し割いてみたところ、そこに都牟刈（つむがり＝頭を切る）の大刀がありました。そこで、速須佐之男命その大刀を手に取って、これは不思議なものだ。私すべきものではないと思い、天照大御神にいきさつを説明して、献上されました。これは後に、草那藝（草薙）の劒と呼ばれる大刀であります。

（４）八俣遠呂智退治後日談

『故是以、其速須佐之男命、宮可造作之地、求出雲國、爾到坐須賀、地而詔之「吾來此地、我御心須賀須賀斯而。」其地作宮坐、故其地者於今云須賀也。茲大神、初作須賀宮之時、自其地雲立騰、爾作御歌、其歌曰、夜久毛多都　伊豆毛夜幣賀岐　都麻碁微爾　夜幣賀岐都久流　曾能夜幣賀岐袁　於是喚其足名椎神、告言「汝者、任我宮之首。」且負名號稲田宮主須賀之八耳神』

速須佐之男命は宮を造ろうと、出雲の國中を探して、須賀の地にやって来た時、「私の心はすがすがしい」とその地に宮を造られました。その時お詠みなられた歌が

八雲立つ　出雲八重垣妻ごみに　八重垣作る　その八重垣を

そして、足名椎神を召して、「汝は我が宮の首（おびと）に任ずる」と命じられました。そして、稲田宮主須賀之八耳神（いなだのみやぬしすがのやつみみのかみ）と命名されました。

速須佐之男命の六代目ご子孫が大国主神であります。大国主神は亦の名を、大穴牟遅神（おおなむぢのかみ）、葦原色許男神（あしはらのしこおのかみ）、八千矛神（やちほこのかみ）、宇都志國玉神（うつしくにたまのかみ）と合わせて五つのお名前をお持ちです。

（続く）

速須佐之男命の冒険譚あるいは英雄譚というべき八俣遠呂智退治物語は通常の英雄譚とはいささか順序が異なっています。すなわち、一般的な英雄譚では、元気で勇気ある若者が怪物、悪者を成敗した後、英雄としては姫と結ばれる、という流れになります。

しかしながら、速須佐之男命の八俣遠呂智退治物語は、八俣遠呂智をまだ退治もしていない、しかも退治する、とも言っていない段階で足名椎、手名椎に櫛名田比賣をくれ、と要求しています。足名椎、手名椎も要求する人物がどういう出自か聞いただけで、速須佐之男命の要求を呑んでいます。

考えられるのは、葦原の中つ国の出雲國の肥河の上流の鳥髪という地方の集落でも、天照大御神と速須佐之男命の存在は知れ渡っており、速須佐之男命とは初対面であっても、これは本物の速須佐之男命だと思わせる威風が備わっていた、というべきでありましょう。

なお、速須佐之男命がお詠みになった歌

八雲立つ　出雲八重垣妻ごみに　八重垣作る　その八重垣を

は、和歌の始原（文献に記録された最古の歌）と言われております。